

小説『静けさの形 ―第七戦・十一回裏の一球について』

第一章 波のような歓声の外側で

球場のざわめきは、巨大な波のうねりのようだった。
しかし、マウンドに立つ山本由伸の耳には、
その音がどこか遠くの世界のもののように感じられていた。

十一回裏、一死一、三塁。
勝てばワールドシリーズ二連覇。
負ければ、一年のすべてが静かに霧散してしまう。

だが、その重みは彼の心の内側にはほとんど入り込んでいない。

指先についた土を軽く払ったとき、
彼が感じたのは、プレッシャーではなく、
少年のころ、校庭で投げたボールの匂いだった。

——あのころは、ただ投げるのが嬉しかった。

そんな記憶の断片が、ふいに意識の隅で音を立ててよみがえった。

この瞬間、
彼は世界シリーズのマウンドに立つプロの投手でありながら、
同時に“ただ野球が好きだった少年”でもあった。

第二章 心理の深層で起きていたこと

—自己超越とは「戻ること」である—

極限の場面で、一流選手が“原点の自分”に戻ることがある。
それを心理学ではしばしば自己超越(self-transcendence)と呼ぶ。

人は極度のプレッシャーに晒されると、
意識の外側にまわりついてしまったもの——
役割、肩書き、期待、プライド——
そうした“大人の構造”が一時的に剥がれ落ちる。

そして残るのは、
ただ「これが好きだった」という最も純粋な核。

山本由伸の
「もう無心で。野球少年に戻った気分だった」
という言葉は、この心理プロセスを驚くほど正確に言い当てている。

努力と緊張が頂点に達したその先で、
人は原点へと帰る。

これは技術ではなく、“在り方”の問題なのだ。

第三章 指先の記憶とミットの一点

キャッチャーミットの中央にある小さな黒い影——
それが、彼にとってすべてだった。

そこに投げ込むという一点だけが、
他のすべてをかき消した。

観客席のざわめきも、
走者の存在も、
ゲーム状況の重さも、
未来の結果も。

ミットへ吸い込まれる直前の球の縫い目と、
指先の記憶がつながる感覚。

この世界には、
投げる者と、受ける者の二つだけがあればいい。

そう思わせるほどの静けさが、
あの場面にはあった。

第四章 打球が転がるまでの永さと短さ

腕を振った瞬間、時間は奇妙な二重構造を持った。

一方ではすべてが緩慢に、
もう一方では驚くほど鋭く流れた。

ボールが地面へ弾み、
ショートが前へ出る動きは、
無駄がなく、過不足がなかった。

すくい上げるように捕球したショートは、
滑り込むことも、慌てることもなく、
軽やかなステップで二塁の白いベースに触れた。

そこに焦りの影はなかった。
動作と目的が自然に一致していた。

続く送球もまた、
身体の流れに沿うように、一塁へ送り出された。

スムーズというより、
“流れる”という言葉の方が似合っていた。

一塁手のミットがその白い球を受け取った瞬間、
ワールドシリーズの終わりと、
新しい記憶の始まりが同時に訪れた。

第五章 美しい動作とは何か

美しいプレーとは何か。

それは、
意志と身体が摩擦なく一致している状態だ。

山本自身の投球だけでなく、
あのショートの動作もまた、
同じ静けさの延長にあった。

プレッシャーに押しつぶされるのではなく、
勝利をもぎ取ろうと過度に力むのではなく、
ただ最適解へと身体が自然に向かう。

この“自然な集中”こそが、
自己超越のもう一つの顔である。

個人の意識が薄まり、
世界と同じテンポで動けるようになる瞬間。

それは努力の延長線にありながら、
努力だけでは到達できない場所だ。

第六章 歓声が戻っても、内側は静かなまま

一塁アウトの瞬間、
球場のすべての音が一気に押し寄せた。

歓声、叫び、拍手、音楽。
すべてがひとつになり、スタジアムを揺らした。

だが、山本の内側には依然として静けさがあった。

興奮よりも、安心に近い何か。
勝利よりも、帰郷に近い何か。

あの一球は、彼にとって
“自分を越えた瞬間”ではなく、
“自分に還った瞬間”だった。

だからこそ、
あの淡い手応えは忘れられないものとなる。

第七章 自己超越という「帰還」

私たちは、自己超越を“高みへ登る行為”として捉えがちだ。

しかし本質は逆だ。

自己超越とは、
“余分なものを脱ぎ捨て、根源へ帰ること”である。

背負ってきたものが大きいほど、
人が帰るべき核心はむしろ、小さく、そして驚くほど軽やかになる。

山本由伸は、
努力を積み重ねた結果、
努力を意識しなくても動ける地点に到達した。

その瞬間、
少年としての純粹さと、
プロとしての技術がひとつに融合した。

まさにそれが、
あの軽やかなダブルプレイを呼び込んだのだ。

第八章 静けさの形としての一球

野球とは、音のスポーツだ。
打球音、歓声、捕球音、サインの合図。

しかし、
野球の核心にあるのは“静けさ”だと、
この一球は教えてくれる。

プレッシャーの頂点で現れた静けさ。
投げたあとに訪れた静けさ。
結果が決まった瞬間にも消えなかった静けさ。

そしてその静けさは、
選手だけでなく観る者にも
深い余韻を残す。

あの一球は、
技術の頂点でも、運の産物でもなく、
静けさが形を持った瞬間だった。

終章 私たちはなぜ、あの瞬間に心を奪われるのか

なぜ、あのダブルプレイはこんなにも美しかったのか。

それは、
人が“何かを超える”瞬間ではなく、
“何かへ帰る”瞬間を見たからだ。

人は根源へ帰るとき、
最も自由で、最も強く、
最も美しくなる。

山本由伸の十一回裏の一球は、
その証明だった。

そして私たちは、
その美しさに触れた瞬間、
自分の中にある“原点”もまた
そっと揺り起こされることに気づく。

——ああ、そうだ。
何かを好きだった最初の瞬間は、
こんなふうに静かで、美しかったのだ、と。

—終わり—

Stories on the way.

補章 静けさのあとで ― 寄り添いとキャリアの話

キャリアという長い時間にも、あの一球の静けさは宿る。

あの十一回裏の一球は、
ただのスポーツの瞬間ではなかった。

私たちが日々向き合っている
仕事、キャリア、人生の選択
そのすべてに通じる“心の構造”が刻まれていた。

I. 人は、ときどき「余分な自分」を背負いすぎる

仕事とは、役割と責任が折り重なる世界だ。

評価、成果、周囲の期待、
自分がどう見られているかという意識、
「こうあるべき」
「失敗できない」
そんな思いが蓄積し、
気づけば“本来の自分”の輪郭がぼやけてしまう。

けれど、山本由伸が示してくれたように――

時に人は極限に追い詰められたとき、
不思議なほど純度の高い原点へと戻る。

それは弱さではなく、
本当の強さに触れる瞬間だ。

II. 原点に立ち返ることは、キャリアの中でも起こる

転職を考えると、
昇進の重圧に耐えるとき、
部下育成に悩むとき、
自分の役割と感情が絡まり合い、
自分自身が見えなくなることがある。

しかし、進路に迷う多くの人が
最後の最後に口にする言葉は、
驚くほど共通している。

「自分は本当は、何が好きだったんだろう」

この問いこそ、
キャリアの自己超越に最も近い。

山本があの場合で直感的に辿り着いた“原点”は、
誰にでも起こりうる
キャリアの“帰還点”でもあるのだ。

Ⅲ. プレッシャーの頂点では、むしろ人は静けさを得る

昇格試験、重大プロジェクト、
キャリアの岐路での決断——
そういう極限に近い時間は、
心が揺れ、混乱し、焦りを生み出す。

だが、そこを越えた先にだけ現れる静けさもある。

山本の一球に宿っていた静けさは、
プレッシャーがないから訪れたのではなく、
プレッシャーの総量が限界点を超えたときにだけ現れる“心の解放”だった。

キャリアも同じだ。

迷いが深まりすぎた結果、
人は逆に“自分がどこへ戻るべきか”を
はっきりと見つけることがある。

あれは敗北ではなく、
成熟の証だ。

Ⅳ. 努力の頂点で、人は努力を忘れる

山本が投げたあの一球は、

努力で作り込んだ技術ではなく、
“努力を意識しない地点まで到達した技術”だった。

キャリアもまた同じである。

学び、経験し、失敗し、
もがき、積み重ね、
それでも迷い続けたその先で——

ある日ふと「自然にできている」感覚が訪れる。

あの一球がそうだったように、
努力とは、
意識しなくなるまで積み重ねた先に初めて花開く。

V. 静けさは、人生の最重要的な指針になる

多くの相談者が、
キャリアに悩む理由のひとつは、
内側の静けさを見失っていることだ。

周囲が騒がしく、
世界が速すぎるときほど、
人は静けさから遠ざかる。

だが、本当の方向性は、
派手な成功や賑やかな声のなかにはない。

山本由伸の一球が示していたように——
本質は、静けさとともに姿を現す。

静けさは「逃避」ではなく、
「選択の根拠」であり、
「内側の羅針盤」なのだ。

VI. 原点へ帰ることは、前に進むための条件である

あのダブルプレイの美しさは、

選手の技術の結晶であると同時に、
“原点へ戻る勇気”の結晶でもあった。

キャリア相談でも同じことが起こる。

自分のやりたいことを忘れた人が、再び思い出す瞬間
自分の弱さを受け入れ、静かに歩み始める瞬間
他者の期待から離れ、自分の人生を選ぶ瞬間

これらはすべて、
山本由伸の「野球少年に戻った感覚」と同じ構造を持つ。

キャリアに迷う人を支援するとは、
その静けさへ戻る道を探す旅の伴走者になることだ、と
この一球は教えてくれる。

終わりに — 静けさは、人生のなかで最も確かな場所である

あの一球は、野球の歴史に残る瞬間であると同時に、
人が“自分”へ帰る道筋の象徴でもあった。

私たちもまた、
迷い、焦り、揺れ動く日々のなかで、
何度でも原点へ帰ることができる。

静けさとは、
弱さではなく、
本当の自分へ帰るための最強の場所なのだ。

そしてその静けさに触れたとき、
人はようやく前へ進むことができる。

山本由伸の一球は、
その真実をあまりにも美しく示していた。

キャリアの旅もまた、静けさへ帰る旅である。

本作品の著作権は著者に帰属します。無断転載・引用・複製を固く禁じます。